底部破片である。外面に草花文が描かれた所謂「くらわんか」碗である。18 世紀のものと考えられる。立合宿Ｂ－１グリットより出土した。(14)は瀬戸焼丸碗体部破片である。外面に花弁を描いたもので、19 世紀のものと考えられる。立合宿Ｂ－１グリットより出土した。(15)は志戸呂灯明皿の口縁から底部破片である。内面及び外面上半部に鉄釉が施してある。小型で、19 世紀のものと考えられる。(16)は志戸呂焼の徳利体部破片である。外面は茶褐色の施釉の上に灰釉で斑模様に「虎斑（とらふ）」技法で装飾してあり、19 世紀のものと考えられる。(17)は志戸呂焼の徳利体部破片である。外面には褐色の鉄釉がたっぷり施釉されてあり、19 世紀のものと考えられる。(18)は志戸呂焼カメの口縁部破片で、先端部を外反させている。内外面ともに褐色の鉄釉が施釉してある。(19)は志戸呂焼カメの口縁部破片である。外面はヘラ工具により波状の模様を描き、半円状に粘土紐を貼り付け装飾効果をつけてある。外面は濃い緑色の灰釉が、内側は褐色の鉄釉が施釉してあり、19 世紀のものと考えられる。(20)は瀬戸焼擂鉢の口縁無部破片である。先端に向かって少し外反し、先端部が丸く収めてある。19 世紀に位置のものと考えられる。(21)は志戸呂擂鉢の口縁部破片である。先端に向かって段をもち、先端部を尖らせてある。内外面ともに薄い鉄釉が施してあり、擂鉢Ⅱ類の最終段階の 19 世紀後半のものと考えられる。

⑤仲間の宿

仲間の宿の発掘調査対象地は復元建物の裏側にあたり、既存の建物を撤去した後に、範囲は幅 8m・長さ 14mの 112 ㎡を対象として発掘調査を実施した。表土より 50cm ほど掘り下げると、締まった砂利層が現れ、建物の基礎らしき痕跡が広がっていたので、遺構確認面とした。遺構からは、石組 3 基・土坑 2 基を検出した。

1 号石組は、調査区北側より拳大の河原石を使用し、南北方向には 6.5mの長さで 33 個、東西方向には 5.0mの長さで 17 個をＬ字状に配列してあった。南北の南側端が丸くなっていたことから、この長さが 1 辺の方形に並んだ建物の基礎と想定される。なお、基礎の内側には灰褐色の粘土が貼り付けられ、土間状に固められ、ここに 2 号土坑が掘り込まれていた。土坑の大きさは直径 1.2mの楕円形で、深さが 20cm ほどあり、貯蔵穴と考えられる。

2 号石組は、東西方向に 3.5mの長さで 11 個の河原石を配列してあり、南側端は農業用水路脇にあたり、手前には拳大の河原石が多量に敷き詰められ、粘土や砂利を混ぜて貼り付けてあった。隣接して直径 1.2m、深さ 90cm の貯蔵穴と思われる 1 号土坑があった。こうしたものを含め、水路に近いので台所、ないしは洗場などの施設と考えられる。18 世紀のものと考えられる志戸呂焼の灯明皿がほぼ無傷の状態で出土した。

3 号石組は、南北方向に 2.0mの長さで７個の河原石を配列し、平行して東側にも幅 20cm の間を空けて拳大な石が一列並べあった。間に河原石を敷き詰めてあり、水路の一部とも考えられる。２号石組の西側にもわずかに２列あり、繋がっていた可能性もある。

水路を隔てた南側には、長さ 2.5m、幅 1.6m、深さ 20cm の大型土坑が検出された。内部からは、多量の河原石とともに多量の伊万里焼碗・唐津焼大皿・志戸呂焼徳利・碗・香炉・擂鉢などの陶器片が出土した。これは 18 世紀から 19 世紀にかけての破片類である。

出土遺物はテンバコ 3 箱分あり、19 点を実測し掲載した。(22)から(28)までは碗類を一括した。(22)は瀬戸の丸碗破片で、体部が直線的で先端部を尖らせた器形であった。内面と外面の体部に鉄釉が施釉してあり、19 世紀のものと考えられる。仲間の宿の水路内より出土し

た。(23)は志戸呂焼の丸碗破片で、内外面ともに灰釉が施釉してあり、断面方形の高台を貼り付ける。上志戸呂古窯製品に類似しており、16 世紀末から 17 世紀初頭のものと考えられる。仲間の宿裏側の１トレンチより出土した。(24)は志戸呂焼丸碗の体部から底部までの破片で、体部が緩やかに内湾する。内外面ともに鉄釉が施してあり、貼付高台により 17 世紀のものと考えられる。仲間の宿裏側の１トレンチより出土した。(25)は志戸呂焼丸碗の体部破片である。体部は直線的で内外面ともに鉄釉が施してあり、17 世紀のものと考えられる。仲間の宿裏側１トレンチより出土した。(26)は志戸呂焼丸碗の口縁から体部破片である。薄手で緩やかに内碗し、内外面ともに茶褐色の鉄釉が施してある。19 世紀のものと考えられる。(27)は志戸呂焼碗の体部から底部にかけての破片である。薄手で内側は櫛状工具により同心円を描き、内外面ともに褐色の鉄釉が施しており、19 世紀のものと考えられる。仲間の宿裏側の１トレンチより出土した。(27)は瀬戸焼の碗破片で、外面に笹の絵が描いてある。18 世紀のものと考えられる。

(29)から(33)は灯明皿の皿と受皿で、(29)・(30)は押さえ皿、(31)・(32)は油入皿である。内面と外面の体部に薄い鉄釉が施してあり、底部はヘラ削りで整形してある。(30)は中央に糸切痕が残り、大きさは中型で 18 世紀のものと考えられる。(33)は瀬戸産で、立ち上がりの部分が低い。18 世紀のものと考えられる。

(34)から(36)は土師器のカワラケである。(34)と(35)は小型で薄手な造りをしており、(34)は体部に段がある。(36)は厚手で大型なタイプである。(37)は志戸呂焼折縁皿の口縁から体部破片である。大型で内外面ともに鉄釉が施してあり、17 世紀のものと考えられる。(38)は志戸呂焼小鉢の口縁から体部破片である。口縁先端部をくの字に外反させ、内外面ともに褐色の釉が施してあり、19 世紀後半のものと考えられる。(39)志戸呂焼は広口壷の口縁から底部破片であり、先端部は平坦で釉を拭き取り、体部は口縁から少しずつ脹らむ。外面は茶褐色の鉄釉が施してあり、18 世紀のものと考えられる。(40)は志戸呂焼擂鉢の破片で、口縁は先端部で折れ、先端部は尖る。19 世紀のものと考えられる。

⑥九番宿跡

平成 10 年(1998)3 月 17 日から 20 日までの間、個人住宅建設にともない九番宿跡北側を発掘調査した。調査段階では既存の住宅が建っており、解体後に調査にとりかかった。建物の基礎はコンクリートで、方形に組まれていたが、その下から河原石を配列した一辺が８ｍの石組を検出した。所有者からの聞き取り調査で、この石組は昭和の倉庫と明治期の蔵跡であることが明らかになった。

出土品は土師器カワラケ・志戸呂焼の擂鉢や灯明皿、古銭・砥石などである。江戸時代後期のものと考えられる。

⑦一番宿跡

個人住宅建設に供ない、平成 16 年(2004) 6 月 29 日より 7 月 9 日までの間に発掘調査を実施した。調査に当たり、新築する建物の基礎部分に幅 60㎝、長さ 14ｍのトレンチを設定した。また、以前の聞き取り調査により一番宿の間取りが明らかになったので、土間の痕跡なども確認した。

調査の結果、街道より 10ｍまでの範囲では、立替等により大規模に撹乱されていた。この

発掘により、南側では表土から 20cm 下に川砂の層が堆積し、直径 1m・深さ 80cm の粘土を貼った大型の穴が検出された。おそらく農業用の「水ため」と考えられる。

出土遺物としてはテンバコ１箱分の陶器類が出土し、このうち８点を図化したので以下に説明する。

(41)は志戸呂焼の鉢で、体部は直線的、内外面に灰釉が施してある。(42)は瀬戸焼の鉢で、体部は直線的だが、口縁先端部をやや内側に引く。内面と外面体部までに灰釉が施してある。(43)は志戸呂焼の碗で、体部が内湾し、内面と外面体部まで灰釉を施す。(44)は志戸呂焼皿の底部破片である。体部に内外面とも鉄釉が施してある。(45)は志戸呂焼灯明皿の体部破片で、外面には薄く錆釉が施してある。(46)は志戸呂焼香炉の体部破片で、体部は段をもち、外面に鉄釉が施してある。(47)は志戸呂焼広口壷の口縁部破片で、口縁先端部は平坦で釉が拭き取ってあり、内外面とも灰釉が施してある。(48)は志戸呂焼擂鉢の口縁部破片である。先端部に向かい段をもち、先端部は尖っている。内外面とも錆釉が施してある。江戸時代中期から後期のものが主体であるが、碗(43)・皿(44)・香炉(46)などは江戸時代前期まで遡ると考えられる。

⑧川越遺跡内の調査

川越遺跡五番宿跡の道を隔てた北側に倉庫建設の計画があり、平成 19 年１月 30 日に 2m×2mのトレンチを設置して遺物・遺構の有無を確認した。

表土より 40cm ほど掘り下げたところから、上層 20cm まで粘土質の盛土がされ、砂利層が厚く堆積してあることが判明した。街道より１m北側に当たるが、建物や道跡のような施設は確認されなかった。

⑨五番宿跡

川越遺跡「五番宿跡」内で、住宅の改築計画が持ち上がり、平成 19 年２月 23 日から２月 30 日までの間、「五番宿跡」の東側に 2m×2mのトレンチを３本設定して遺物・遺構の有無を確認した。調査にあたり、現在の基礎付近に１トレンチを設置し、残りの２つは建物の裏側で関連施設や水田などについて過去の状況を把握することを主眼とした。表土より 50cm 掘り下げたところ、１トレンチでは礫が大型化し礫層が厚く堆積していることが判明した。南側のトレンチでは、傾斜のため黄褐色の盛土をして水田を埋め立て、住宅を建設したことが判明した。番宿に関連する遺構は確認されなかった。遺物は、伊万里焼碗・志戸呂焼灯明皿・カメ破片が出土した。19 世紀のものと考えられる。

⑩和泉(泉)屋跡

平成 21 年 12 月 31 日の早朝の火災発生により、泉屋・一番宿を含めて３軒の建物が焼失した。和泉屋跡の所有者斉藤氏より住宅建築の要望があり、平成 22 年(2010)５月 27 日から６月４日まで、新築の基礎に沿って幅 1m、長さ 20mのトレンチをＬ字状に設定し確認調査を実施した。調査は小型重機により深さ 1mまで掘り下げ、断面を精査して土層を観察し、遺物・遺構の有無を確認した。

トレンチ西側の壁を精査したところ、表面に 10～40cm の砕石が敷かれ、その下層に 20～30cm の粘土質の層が堆積していることが判明し、この層より江戸時代の志戸呂焼の擂鉢・碗・

壷の破片、肥前焼の碗などが出土した。新しいものでは明治以降の陶器も含まれており、幕末から明治期の地層と思われる。伝承では、明治初年に建てられ、明治 19 年(1886)と昭和 59 年(1984)に建替えられたと言う。南側には大規模に盛土された痕跡が確認されたことから、水田を埋め立てて造成されたものと考えられる。

小括

これまでの発掘調査では、直接的に川越遺跡に関連する成果はほとんど検出されていない。仲間の宿跡裏側で建物の一部と考えられる石組を数箇所検出しているが、旧東海道からは距離があるので番宿とは関係がなさそうである。しかし河原石を方形に並べて基礎にしている点は、この地域の建物の構築方法の特徴であろう。現在復元されている番宿の基礎では同じ方法を取り入れているので、工事業者も参考にしているものと思われる。

次に遺構面について考えてみたい。仲間の宿・酒屋跡などでは、表土より 50cm 下から遺構が確認されている。一番宿跡でもシルト混じりの層が同じレベルであり、江戸時代中期から後期の陶器片が出土している。慶応 2 年（1866）5 月、二番宿・立合宿・仲間の宿を含め 13 軒が火災により焼失した記録がある。発掘調査では立会宿・仲間の宿跡より焼土を含んだ層が発見されているので、この面を 19 世紀中頃の包含層として捉えておく。

なお、せぎ跡の調査では表土より 80cm 下からせぎ跡の石が発見されている。一番宿の浄化槽立会いでは、やはり１ｍ下から焼土混じりの粘土層が検出されており、包含層と考えられる。厚い礫層が堆積しているが、大井川の氾濫による可能性が考えられる。

出土遺物は、徳利・擂鉢・碗などの日常の生活用品が多い。番宿は、川越人足が待機した場所と考えられ、30 人から 60 人が一つの宿に待機したと言われているが、川越しが行われる時間帯以外は無人であったのであろう。陶器類を見る限り、宿場集落から出土する遺物と種類は変わらない。今後は宿場遺跡と比較して検証する必要があるが、基本的には川越し場近辺でも生活していたと考えられる。年代については、18～19 世紀を中心とするが、17 世紀前半の香炉や碗も出土しており、16 世紀後半までの上志戸呂窯出土品に類似する碗も出土している。現時点では、川越遺跡に人々が住み始めた時期を 16 世紀後半であると考えておきたい。
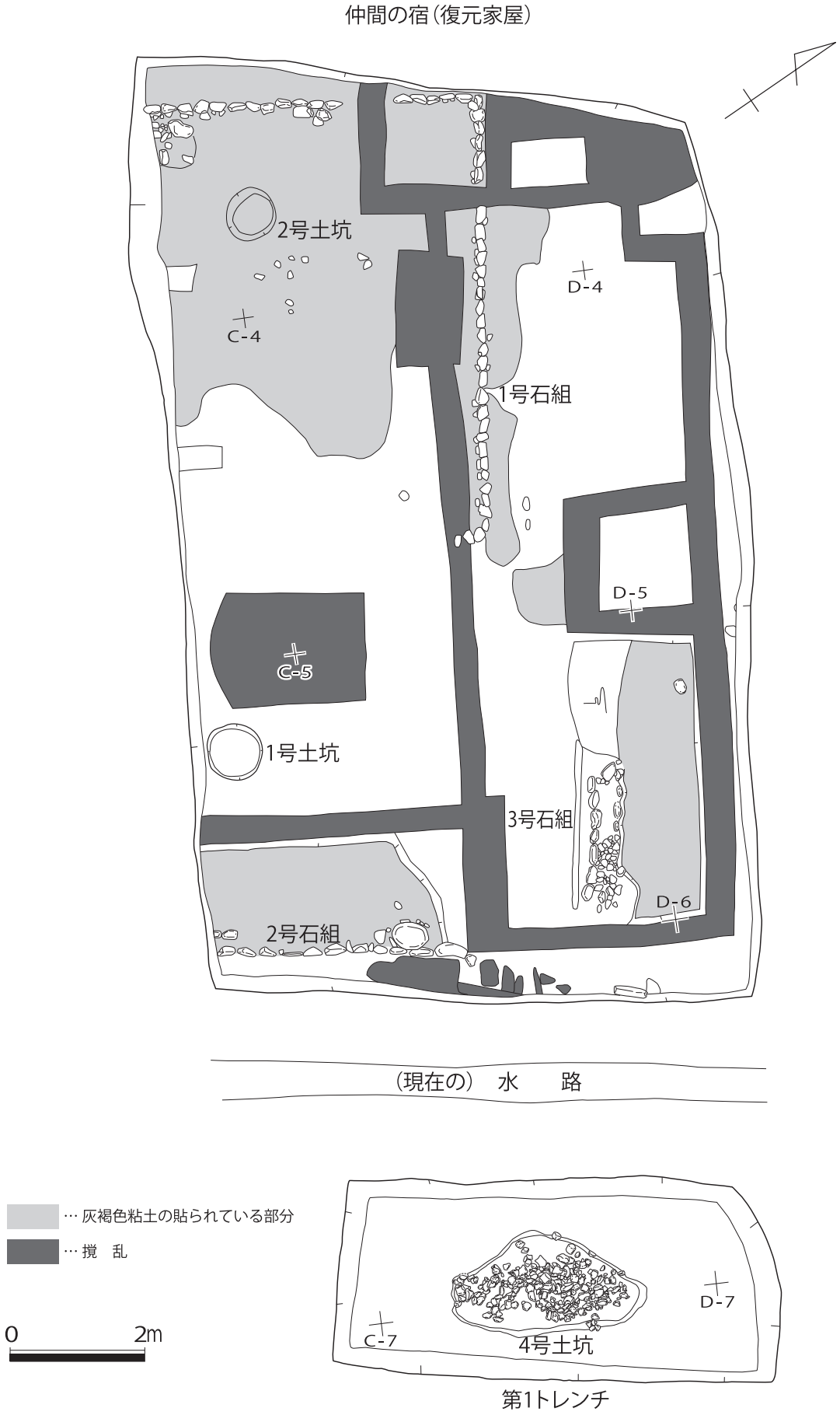
図３－22 仲間の宿・第一トレンチ遺構平面図